

Kotonk使用に見られる日系米国人の アイデンティティについて¹⁾

木 下 英 文

はじめに

Kotonkは、第二次世界大戦中ハワイ出身の日系人兵士たちが米国本土出身の日系人兵士に付けた蔑称を指す。この名称は、日本語の「コットン」または「コッソ」に相当する擬音語だとされるが、それが具体的に当時どのような否定的意味合いを伴って使用されていたかについては必ずしも明らかではない。Bucholtz and Hall(2005)は、相互行為に焦点を当てることで言語とアイデンティティの関係を考察しているが、その中で、コンテキストを精査することによって言及対象に付与される一連の社会的意味を明らかにすることが可能であると指摘している(594)。そこで本稿では、ハワイ日系の第二次世界大戦退役軍人を対象とした回顧インタビューを分析することで、今では一般的にその存在を知る人が少なくなりつつあるKotonkの社会的意味を明らかにするとともに、その使用を通して交渉される彼らのアイデンティティについて考えたい。

1. 他者言及とアイデンティティ：相互行為からの視点

アイデンティティが言語によって方略的に構築されるものであることは、Strauss (1997), Duszak (2002), Bucholtz and Hall (2004, 2005) らによって指摘されているが、²⁾ Bucholtz and Hall(2005)は、アイデンティティ構築に関わる様々な要因について(1)のように述べている。

(1) Identity may be in part intentional, in part habitual and less than fully conscious, in part an outcome of interactional negotiation, in part a construct of others' perceptions and representations, and in part an outcome of larger ideological processes and structures. (585)

すなわち、アイデンティティは、個人の意図以外の要因によっても構成される場合があり、相互行為の過程や、他者の視点、また、より大きな社会の枠組みとの関係でも構築され得るのである。以下では、他者言及表現としてのKotoknが米国日系人のアイデンティティ構築にどのように関係するかについて考えるが、まずは、名前付けとカテゴリー付与の関係について概観する。

名前付けという行為は、言及対象に注意を向けさせる効率的な方法であるが、それは言及対象が何らかのカテゴリーに属するものとして特定されることで可能となる。Bucholtz and Hall (2005)は、相互行為の中でアイデンティティ構築に言語が果たす役割を指標性という点から論じる中で、互いに関連し合う指標過程の一つとして、名前付けを挙げている。

(2) Identity relations emerge in interaction through several related indexical processes, including: (a) overt mention of identity categories and labels; (b) implicatures and presuppositions regarding one's own or others' identity position; (c) displayed evaluative and epistemic orientations to ongoing talk, as well as interactional footings and participant roles; and (d) the use of linguistic structures and systems that are ideologically associated with specific persons and groups.

(Bucholtz and Hall, 2005:594)³⁾

すなわち、明示的に言及対象に名前を付ける行為は、単に辞書的な意味での定義づけを当該対象に行うだけでなく、相互行為における話者と聞き手との立場関係をはじめとして、他の様々な意味行為とも関係づけられているのである。例えば、(3)を考えてみる。

(3)He is Issei.

ここで、言及対象にIsseiという名称を与えることは、その対象を“a Japanese immigrant to North America” (*Oxford Dictionary of English, 2nd ed., revised*)という定義を共有する集団の一員として見なすことを示すが、その行為には、相互行為における相手との対人関係や、言及対象に対する話者の価値評価も影響するであろう。また、日系1世の集団と他の集団（例えば、ヒスパニックの集団や日系2世の集団）との関係によって生じる社会的意味がそこに関わることも考えられる。このように、名前付けによって付与されるアイデンティティは、言及対象に本来備わった内的特性というよりは、相互行為の中で構築されるものであることがわかる。⁴⁾

では、そのようなアイデンティティ付与に関わる一連の社会的意味はどのようにして明らかにすることができるのであろうか。Bucholtz and Hallは(2005)は、(4)に見られるようにコンテキストの精査が有効であると指摘する。

(4) ...the linguistic elaborations and qualifications they (=referential identity categories) attract (predicates, modifiers, and so on) all provides important information about identity construction.

(Bucholtz and Hall, 2005: 594)

すなわち、言及対象のカテゴリーを詳述・限定するような言語表現（述部・修飾部など）が、アイデンティティ構築に関わる重要な情報を提供すると考えられるのである。例えば、(5)を考えてみる。

(5)He is a Japanese man but he is nice.

ここでは、2つの命題が提示されているが、言及対象には前半の節において“Japanese man”というカテゴリーが付与され、後半では“nice”という属性が話

者の価値評価として与えられている。逆接の接続詞butはこれら2つの命題を関係づけているが、それはJapanese manによってカテゴリー化されるアイデンティティがniceという性質を含まないと話者が含意していることを示すのである。このように、コンテキスト注目することで、言語を通して参与者間で構築されるアイデンティティの詳細を明らかにすることが可能となる。以下の考察では、このアプローチに基づき、Kotonkという具体的名称の使用に焦点を当て、それによって表現される日系米国人のアイデンティティについて考察を進めることとする。

2. ハワイと米国本土：日系人兵士間の対立

Kotonkが第二次世界大戦中にハワイ出身の日系人兵士たちによって米国本土出身の日系人兵士に付けられた蔑称であることは冒頭で触れたが、その由来にはいくつかの説がある。例えば、Lind (1946)は、それが「空樽が地面に落ちた音」(“an empty barrel falling to the ground”)を指し、上品で覇気のない本土日系人を闘志あふれるハワイ出身者が揶揄したものだ、と述べている (165)。一方、Murphy (1954)は「新兵が従事させられた石炭運搬作業の音」と「乱暴なハワイ日系人兵士が本土日系人兵士の頭と頭をぶつけた音」の2つの説を紹介し (115)、また、Matsuo (1992)はMurphyの後者の説に似た説として「米国本土出身の日系人兵士がハワイ出身の日系人兵士に殴られた音」(73)を挙げている。⁵⁾

これらいずれ説にも確証はないが、このような蔑称が生まれた背景には第二次世界大戦中に作られた日系米国人部隊内での両集団の折り合いの悪さがあった。当時、ハワイと米国本土から志願した日系人兵士たちは、訓練のため陸軍キャンプで合流したが、当初、彼らは互いに衝突を繰り返していたとされるのである。D.イノウエは、当時の問題の深刻さを以下のように回想している。

(6)It was a bad situation and this is part of the history of the 442nd. It was so bad the senior officers were considering calling it quits. They considered disbanding the

whole regiment and disbursing the men throughout the U.S. into labor battalions; the experiment was a failure. Fights were epidemic and we were threatened on a couple of occasions (by the officers). There was a boxing match. Mainland versus Hawaii. It was a slaughter because the other side got smashed. (Matsuo, 1992: 71-2)

このような摩擦が両集団の間で起きた具体的原因については、様々なものが考えられようが、Kitanoは、共通の祖先を持つにもかかわらず文化的に異なった面を持つ米国本土出身の日系兵士たちをハワイ出身の日系兵士たちが快く思わなかったため、と指摘する。

(7)The mainlander [Nikkei from continental U.S.] was considered [by Nikkei in Hawai'i] standoffish and uptight, overly concerned about surface appearances, materialistic, too careful about impressing the majority group, too acculturated, and, in one word, too haolefied (white). (Kitano, 1976:165)

ここで本土の日系人の特徴は“in one word, too haolefied (white)”という表現でまとめられているが、haoleとはハワイ社会において主に白人を指す表現である。この名称は、ハワイ語で“foreign”を意味するが、19世紀から20世紀にかけて現地のサトウキビ農場の経営を支配した米国本土の白人たちを揶揄する蔑称として用いられたもので、今日ではハワイ社会に対する外部の抑圧的勢力一般を指して用いられることもある。このことから、ハワイ出身の日系兵士たちにとって、本土の日系人の振る舞いが過度にhaole的に映ったということは、彼らの存在が抑圧的に感じられ、それが反発の対象となったことを示唆している。⁶⁾

では、このような敵対関係にあった日系人の集団間で用いられたKotonkは、当時どのような具体的意味を併って用いられていたのであろうか。次節では、ハワイ日系退役軍人の回顧インタビュー分析を通して、Kotonkに付与された社会的意味について考えたい。

3. ハワイ日系人の回顧インタビューに見られる Kotonk の社会的意味

本稿の分析では、上記Bucholtz and Hallの指摘に基づき、他者言及にKotonkが使用されたコンテキストを精査することで、その社会的意味を導き出すこととする。データとしては、米国ハワイ州Japanese Cultural Center of Hawaii Resource Center所蔵のOral History Collection Transcriptsを用い、ハワイ日系の第二次世界大戦退役軍人を対象に行われた回顧インタビューを分析対象とした。⁷⁾ 当インタビューにおいては、米国本土出身の日系人たちとの兵役中の折り合いについての面接者 (=IR) の質問 (ex.“How did you get along with Kotonks?”) に対する被験者 (=IE) の回答部分を中心に、言及対象に付与された諸特徴をKotonkという言葉と表現と関連付けて考察することとする。

3.1. 言語変種の違いに起因する劣等感

ハワイ出身の日系兵士たちの回答に見られる本土の日系人兵士たちに対する感情については、両集団が持つ言語変種に見られる違いへの関連付けが多く見受けられた。(8)は当時のKotonkとの関係についての質問に対するハワイ日系人兵士のコメントの一つであるが、言語変種の違いが彼らを感じた劣等感とつながっていたとするIEの主張に注目したい。

(8)IR: What was your feeling about meeting all these Kotonks for the first time?

IE: Well, I got so mad with them because they talk such good English. Just like taking us cheap. ⁸⁾

ここでは、IEが本土の日系人を腹立たしく感じた理由が彼らが話す“good English”であった点を指摘した上で、彼らの話し方が自分たちを見下しているように聞こえたと述べており、これはKotonkという名称に本土で話される標準(またはそれにより近い)変種に対するIEの否定的評価がその意味合いとして

意識されていることを示している。標準変種は、制度的枠組みの中で正当化されることで権威づけされ、当該話者の優位性を示す標識となるが、ハワイの日系人兵士たちはピジン英語と呼ばれる非標準変種を使用していたために、彼らは本土出身の日系人の話す英語に高圧的な印象を持ち、反発を感じたのではないかと考えられる。⁹⁾

同様の回答は(9)においても示されるが、ここでは、上述の“haolefied”が用いられており、それが両集団の衝突の原因となったとの回答が示されている。¹⁰⁾

(9)IR: Why you think some of the Hawaii guys cannot get along with the "Kotonks"?

IE: I don't know. Maybe the way they speak, yeah? Like local boys they talk ordinary but the way they speak I think, all pidgin English. They speak really "haolefied." ...

IR: You think part of the feeling was the Hawaii guys listen to these "Kotonks" talking good English and just like hey these guys they think they're "Haole" or what?

IE: Yeah, that's what I think because local boys they speak English, they understand, but when the mainland "Kotonks" they listen how we, you know, what they talking about? They cannot understand so that's where the friction came in, I think, but later on they wanted to learn how to speak how we speak. (Laughter)¹¹⁾

このやりとりでは、まずIEがハワイ出身者（“local boys”）とKotonkの話し方の違いを挙げ、彼らの英語がhaolefiedであるという点に言及しているが、IRはそれを補足することで、白人に同化した存在の象徴としてのKotonkの話し方（“good English”）に対する反発の有無をIEに確認している。

これらの例が示すように、Kotonkという名称には、言語変種の違いに起因するハワイ日系人の劣等感や白人に同化することへの否定的感情が、その意味として付与されていると考えられる。ただ、以上のIEの報告に見られる言語変種

の違いに対する否定的評価については、それらが言及対象が持つ客観的な属性として裏付けられるか否かが重要ではなく、あくまでも話者の主観によって左右される度合いが大きい点を指摘しておかなければならない。確かに、(9)のIEが指摘するコミュニケーションに伴う困難から生じる不満は両集団間の摩擦の原因として存在したであろうが、言語に見られる違いは集団を分断し境界線を引く有効な理由として、しばしば故意に利用される点も忘れてはならないだろう。Chun (2001)が米国社会における白人の優位性への対抗意識を表現する手段としてアジア系米国人が黒人英語(AAVE)を用いる例を報告しているように、われわれは必ずしもカテゴリー化を客観的妥当性にに基づき行うわけではない。ハワイ日系人兵士の場合も、彼らの言語変種の違いへのこだわりは、相容れない存在としての他者を対比的に持ち出すことによって、内集団成員間のアイデンティティ共有を確認・強化する役割を果たすという側面もあるのである。事実、これら2つの日系人兵士の集団は、その後、相互理解を深めることで団結して兵役に当たることとなるが、興味深いことに、ヨーロッパ戦線に送り込まれた彼らは、(10)に示されるように、戦場で互いの中でピジン英語を使うことがあったとされる。

(10)But we had the advantage. From what I understand throughout the war, is that we communicated with pidgin English when the critical time comes around, so the enemy happen to tap in our line, then they would be confused and they would be at loss as to what we were talking about.¹²⁾

すなわち、戦場であって仮に敵の盗聴があったとしても、ピジン英語の使用が一種の暗号の役割を果たすと考えた、というのである。これは、内集団におけるスラングの役割と同じ原理であり、彼らの間で生じたアイデンティティの捉え方の変化が言語使用に表れたことを如実に示す例だといえよう。

以上の考察から、Kotonkという名称によって括られるカテゴリーが白人文化への過度の同化・抑圧的存在という意味合いに関わること、そして、言語変種

に見られる違いが両集団間の境界線を引く上で非常に分かりやすい標識として彼らに捉えられていたことが明らかになった。

3.2. Kotonk のその後：立場関係の変化をめぐって

言及対象が相互行為の中で状況に応じてカテゴリ化されるものであるとすれば、戦時中にKotonkに付与された意味に対する意識は、これら2つの日系米国人兵士の集団がその後和解した際にどのように変化したのであろうか。当然のことながら、日系2世部隊というカテゴリとKotonkと呼ばれる集団に付与されるカテゴリとは両立しないが、(11)では、IEが自身の経験と一般論とを区別することで、Kotonkという名称が持つ否定的意味と両日系人集団の立場関係の変化に一貫性のある説明を加えようする様子を考察することができる。

(11)IR: Let's talk about the Buddhahead and Kotonk situation. You started to say, what was, how did you react to your —?

[a] -----

IE: Well, you know something, I heard this from many people saying that and I gather I'm very surprised

[b] -----

because as far as I was concerned, I was like all along with all of them, I liked them. In fact, I used to welcome them in, you know. I remember particularly, a guy who came from the relocation camp and very handsome, nice guy, really nice-looking, nice guy. In fact, frankly, I can tell you I've never met one guy like a Kotonk. I liked every one of them. They were really nice. They were very courteous and they tried their best.

[c] -----

And so I didn't know where this story came, "we didn't get along." I, personally, lot of us got along very well with them.

[d] -----
Of course, they were in the minority because, well, guys, unfortunately, well,
[e] -----
probably, the way it started was that when they got there, all the (???) were
already picked and they were all mainland people. They were all at the star
and stripes. They were the first sergeant and the sergeant, step-sergeant so
maybe that's where it began. And Hawaii guys had to start from the bottom
(???)¹³⁾

ここで、IRの質問にある“Buddhahead and Kotonk situation”とは、ハワイ出身と
本土出身の日系人兵士との間で繰り返された衝突を指すが、IEは、その原因に
ついての自らの考え ([d]-[e]) を提示する前に、個人的経験に基づくKotonkに対
する肯定的評価 ([a]-[c]) に言及している。Pomerantz (1984)は、会話参加者が相
手の意見に異義を唱える場合、隣接ペアの後半が有標化し言語構造が複雑化す
る (=非優先応答) と指摘しているが、このIEの発言は同様の構造を持ってお
り、IRによって期待された回答ができない旨が前半 ([a]-[c]) で示唆され、後半
で求められた質問への回答が示されるという形で構成されている。そこで用い
られる表現については、(12)に示すように、Yule (2000:81)が提示した非優先応答
に特徴的に見られる一連のパターンの使用が認められる。

(12)“well” (PREFACE) [a, d]

“you know” (APPEAL FOR UNDERSTANDING) [a, b],

“I heard this from many people” (MAKE IT NON-PERSONAL) [a]

“I’ve never met one guy like a Kotonk,” etc. (GIVE AN ACCOUNT) [b, c]

これらは、「前置き」を長く複雑にすることで話者の発言内容が聞き手の期待に
必ずしも沿うものではない点を示唆する役割を果たすが、(11)の回答では、さら
に、続いて提示される[e]においても、“probably” “maybe” (EXPRESS DOUBT)を

用いることで、重ねて話者が自らの回答についての留保を示していることがわかる。¹⁴⁾

人は自らの過去を語る際に、現在の観点から一貫性を保とうとするが(Gergen and Gergen, 1983:255)、Kotonkという名称によって過去にカテゴリー化されたアイデンティティは、その後当事者であった2つの日系米国人兵士集団が和解したことによって、維持することが困難になったと考えられる。従って、当該回顧インタビューにおいても、IEは当時Kotonkが持っていた否定的意味合いを正確に再現することに抵抗を感じたために、(11)のように発言を構成したのではないかと考えられる。¹⁵⁾

おわりに

本稿は、ハワイ在住の第二次世界大戦退役軍人である日系米国人を対象に行われた回顧インタビューの分析に基づき、具体的コンテクスト内においてKotonkが付与するカテゴリーをめぐる考察を行った。その結果、(1) 第二次世界大戦中に本土出身の日系人兵士を揶揄する目的でハワイ出身の日系人兵士が用いたKotonkという蔑称が、過度に白人へ同化した("haolefied")存在としてのアイデンティティを本土の日系人兵士に付与する意図を持って使用されていたこと、(2) その後の両集団の和解に伴って互いに対するアイデンティティの捉え方に変化が生じたために、Kotonkについて被験者が語る場合に、一般論と個人の経験とを区別して発言を構成することで、Kotonkが持つ否定的意味への自身の態度をあいまいにする場合のあること、がそれぞれ明らかになった。このように、具体的コンテクストにおける他者言及表現の考察においては、相互行為の参与者の立場関係についての詳細が明らかになることで、言及対象に付与されるアイデンティティと言語表現との関係が、より包括的な形で捉えることが可能になるのである。

註 釈

- 1) 本稿の内容の一部は、木下英文 (2010)「ハワイ日系人の言語使用に見られるエスニシティについて」文化伝統の継承に関する総合的研究プロジェクト編『文化伝統の継承に関する総合的研究—衝突と創生—』（平成20・21年度愛媛大学法文学部人文系学部長裁量経費研究成果報告書, 5-10頁）と重複する。
- 2) ...identity is not simply the source of culture but the outcome of culture: in other words, it is a cultural effect. And language, as a fundamental resource for cultural production, is hence also a fundamental resource for identity production. (Bucholtz and Hall, 2004: 382)
- 3) Duszak (2002:6-7)は、人称代名詞、言語変種、コード切り替えなどをその例として挙げている。
- 4) ...identity is the product rather than the source of linguistic and other semiotic practices and therefore is a social and cultural rather than primarily internal psychological phenomenon. (Bucholotz and Hall, 2005:585)
- 5) 一方、ハワイ出身の日系人兵士たちは、米国本土の日系人兵士たちからBuddhaheadという蔑称で呼ばれていた。こちらの名称の成り立ちにも諸説があり、米国社会への適応度の低さを仏教に対する信仰という点から揶揄したものとする説、「豚の頭」(“buta head”)が軟化したものとする説、また、カボチャを表す日本語の方言である「ボウブラ」と英語の“head”を組み合わせて作られた“bobura head”（英語で「ボンクラ」を表す“pumpkin head”に相当する）が軟化したものとする説などがあるが、いずれにも確証はない。
- 6) Haoleが表す抑圧の意味合いの詳細については木下（2009）を参照のこと。
- 7) ハワイ大学所蔵の*Oral History Collection*のデータも一部使用した。
- 8) JF: 1923年生まれ。オアフ島出身。
- 9) ハワイ出身の兵士の多くが用いたとされるハワイ・クリオール英語（俗にピジン英語と呼ばれる）は、様々な移民労働者が集まるサトウキビ農場の中で、移民二世代以降の人々によって母語として習得された言語であるが、独自の言語体系を持つために本土出身の日系兵士との意思疎通には当初問題が生じたようである。
- 10) 個人レベルでKotonkに対する否定的感情がない場合でも、以下の例のように、言語の違いから生じる違和感は報告されている。

IR: Did you get along okay with them?

IE: I don't know whether the name "Kotonk" came out, but anyway, we got along fine. We got along real fine. Maybe the language is English but a little different but so what? It all came out to a point.

IR: You never got in fights with the Kotonks?

IE: No, not that I know. (SF: 1916年生まれ、ハワイ島出身)

11) IK: 1922年生まれ、カウアイ島出身。

12) SY: 1923年生まれ、ハワイ島出身。(ハワイ大学所蔵の*Oral History Collection*より。Tape Nos.44-4-1-05 and 44-5-1-05)

13) JT: 1924年生まれ、マウイ島出身。(???)は転写不能の部分を目指す。

14) 別の被験者が示した同様の回答を以下に挙げる。

IR: Did you feel any friction or tension, conflicts with Kotonks that you met up with?

IE: You know, Ted, I don't recall having any conflicts with Kotonks. One of my best friends is a Kotonk. And I don't think that I had any conflicts with them, because I didn't have any animosity toward them. They're good people. They were friends of mine. I imagine some other people had conflicts, but I never did. (TI: 1924年生まれ、カウアイ島出身)

15) 次のように、IEが新たなカテゴリー化を行うことで、当事者間の立場関係との一貫性を持たせようとする例も認められた。

“They were the 1st Battalion, so we had three battalions of local boys. Well, when I say “local,” I mean the AJA boys, local and the Mainland boys.” (UH file-44: Tape No. 44-9-1-05 ORAL HISTORY INTERVIEW)

ここで、“local”はハワイ社会において地元出身者を指す表現として幅広く用いられるものであるが、IEはそれを本土出身の日系人も含めた日系人部隊のメンバーに適用して用いている。“local”が持つ社会的意味については木下(2009)を参照のこと)

参考文献

- Bucholts, M. and K. Hall (2004). Language and Identity. In A. Duranti, (ed.), *A Companion to Linguistic Anthropology*. Malden, MA: Blackwell, pp. 369-394.
- Bucholtz, M. and K. Hall (2005). Identity and interaction/ a sociocultural approach. *Discourse Studies*, 7, 585-614.
- Chun, E. (2001). The construction of White, Black, and Korean American identities through African American Vernacular English. *Journal of Linguistic Anthropology*, 11(1), 52-64.
- Duszak, A. (2002). Us and Others: An introduction. A. Duszak (ed.), *Us and Others: Social identities across languages, discourses and cultures*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 1-28.
- Gergen, K.J. and M.M.Gergen (1983). Narratives of the Self. In T.R. Sarbin and K. E. Scheibe (eds.), *Studies in Social Identity*. Santa Barbara, C.A.: Praeger, pp.254-273.
- Kinoshita, H. (2008). Language and Ethnicity Issues in the Nisei Oral History Interviews. *Oral Technical Report Presentation*. The Japanese Cultural Center of Hawaii, Honolulu, HI. May 29.
- Kinoshita, H. (木下英文) (2009). 「ハワイ日系人の用例に見るhaoleの社会的意味」『愛媛大学法文学部論集（人文学科編）』27号69-82頁.
- Kitano, H.(1976). *Japanese Americans : the evolution of a subculture*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Lind, A. (1946). *Hawaii's Japanese: an experiment in democracy*. Princeton: Princeton University Press.
- Matsuo, D. (1992). *Boyhood to War: History and Anecdotes of the 442nd RCT*. Honolulu : Mutual Publishing.
- Murphy, T. (1954). *Ambassadors in Arms: the story of Hawaii's 100th Battalion*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/ dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.57-101.
- Strauss, A.L. (1997) *Mirrors and Masks: The Search for Identity, 2nd ed*. Piscataway, N.J.: Transaction Publishers.
- Yule, G. (2000). *Pragmatics*. Shanghai: Shanghai Foreign Language Education Press.